

書評

カート・ダンジガー

『心を名づけること——心理学の社会的構成』

河野哲也 監訳

勁草書房・二〇〇四年

上 vi+二一六頁・本体二九〇〇円
下 vi+二二九頁・本体三〇〇〇円

心理学が持っている方法論的問題の多くは、一九世紀末以来の心理学が「心」や意識、心的活動など、ほんらい客観的な観察にはなじまないような現象を科学的に扱う「心の科学」を目指そうとしたことに起因している。そうした方法論的な問題の中で心理学者も日常的によく意識しているのは、「心」が直接観察不可能なことからくる心理学的観察や測定の妥当性の問題である。

それ自体は観察不可能な「心」についての概念を、観察可能なものに関するデータから間接的に、かつ客観的に分析しようとする困難な営みは、これまで一二〇年にわたって多数の独自の（そしてかなりひねくれた）技法を生み出してきたし、「科学的心理学」をもっともよく特徴づけているのはそうした技法群である。欲求や知能、動機づけなど直接観察できない心的概念を観察可能な行動を通じて測定しようとする、方法論的行動主義に基づいた「心理学的測定」の原理はその白眉といえる。いっぽうで心理学的測定から得られたデータがどれだけ正確に「心」を反映しているのかという妥当性の問題は、時代を超えて心理学者を悩ませ続けてきた。ここでは、心的概念に対応する事実が（目には見えないが）客観的に実在していることを前提に、それ

をいかに正確に把握するかという問題になっている。しかし、より大きな問題が残っている。それは、心理学がその成果をもとに「心の科学」を打ち立てようとしている「心的概念の客観的観察」が本当に可能なのか、心的概念はほんらいそのような扱いの対象となる性質を持っているのか、という問題である。人の身長や体重（およびその個体差）は客観的に実在し、容易に測定することができる。心理学はたとえば「知能」についての測定を行うが、そこでは「知能」が身長や体重と同じように客観的に実在することが前提となるし、方法論的な批判はあくまでも「知能検査が身長計や体重計に比べて低い妥当性しか持たない」といった点に限られている。しかし、本当に「知能」は身長や体重と同じに扱えるような概念なのだろうか。こうした問題については心理学者よりも、分析哲学者や科学哲学者のほうが意識的に議論してきたように見えるし、心理学内部での大きな議論になることはなかった。

今回翻訳された『心を名づけること——心理学の社会的構成』で、ダンジガーは心理学者の立場から、この問題に正面から取り組んでいる。そして、その問題意識は哲学者たちのそれとは、いくつかの点で大きく異なっている。本

書(原書は一九九七年)は早くも理論心理学・心理学論の「古典」としての評価を得はじめているが、そうした評価はダンジガーが分析哲学や科学哲学の成果をなぞり、それを心理学に適用するのではなく、心理学者ならではの視点からこの問題に切り込んでいることによる。

本書でのダンジガーの基本的な問題意識は「心理学的諸概念はいつどこで、なぜできたのか」にある。人間の身長は人類が誕生した時から存在した。ただ、身長という概念が成立し、それを測定するという営みが生まれたのはずっと後である。しかし、身長という概念や身長測定がない時代には人間には身長がなかったわけではない。身長は確実にずっと存在して、いわば測定されるのを待っていた。しかし「動機づけ」はどうだろう。心理学者が動機づけという概念を形成し、それを測定しようとするより前から、人間の内部にはさまざまな行動や活動への「動機づけ」とそのシステムが実在して、概念が成立し測定されるのを待っていたのだろうか。ダンジガーはそうではないと考える。「動機づけ」は心理学者によって発明されるまで存在せず、心理学者がその概念を発明することによってはじめて存在するようになったのである。

ダンジガーは「知能」や「行動」、「態度」や「パーソナリティ」など心理学の根幹をなす概念の多くが、そのように心理学者によって発明されたものと考え、それだけでなく、そうした概念の発明と、その時代の心理学のおかれた状況、心理学と社会との関係などが深く結びついている

ことを示そうとする。ダンジガーの心理学史についての広範な知識と、心理学的概念の持つ方法的な問題とが関係づけられることで、本書は心理学的概念の歴史を通じて、「科学的心理学」の歴史全体を包括的に分析するものともなっている。

本書は全体で一〇章の構成になっている。第一章「心を名づけること」では、ダンジガーがインドネシアで経験した、西欧の心理学と「ヒンズー的心理学」が基本的な概念のシステムにおいてすでに別個の構造を持っており、同じ「心理学者」間でも議論がならぬ成立しないという事実からスタートして、心理学的概念の文化依存性や「社会的構成」という視点を提示するとともに、さきに解説したような本書全体の考え方を概説している。

第二章「古代の哲学者たち」から第三章「大転換」にかけては、科学的な心理学が成立する以前に「心」に関する諸概念がどのような性質を持っていたかが概観される。心理学以前の心的概念が、現在の心理学におけるそれらの用法とはまったく違う位置づけを持っていたことが、ギリシヤ哲学までさかのぼって説明されている。アリストテレスから中世までの心的概念が、つねに人間の本性や倫理的な目標などと結びつく概念であったのに対し、一八世紀以降には心的概念が人間の行為を「動機づける」道具と位置づけられるとともに、そうした心的要素の強弱や個人差といった現代心理学に直接結びつく視点が生まれてきたことが明確になっている。

第四章「生理学的背景」ではその後の心理学を支配する「刺激と反応」の図式が生理学の影響を受けて成立する過程、「心的エネルギー」によって刺激と反応とが媒介される図式の誕生について述べられる。初期の科学的心理学者たちが生理学を学問的基盤にしていたことはよく知られるが、そのことが現在まで続く心理学の基本的な構造に影響していることを意識することは少ない。

そして第五章「知能を地図に載せる」ではついに「知能」の誕生が分析される。知能概念や知能の測定が特殊教育という要請から誕生したことは教科書的な事実だが、ダンジガーはより広く、教育制度の普及との関係、教育を前提とした産業や軍事分野での人事考課の要請と心理学との関係、それと連動した心理計測学・心理学的測定の発展を分析することで、知能概念と知能検査がそうした概念による人間の分別を必要とした社会的要請と、それを利用して科学としての位置づけを得ようとする心理学との共同作業によって生み出された過程を鮮やかに浮き出させている。

第六章の「行動と学習」は、本書の中でもっとも刺激的な章といえるのではないだろうか。「心理学は行動の科学」「心理学の目的は行動の理解と予測・制御」というテーゼはわれわれ心理学者にはなじみ深いものであり、「心」の分析はそれが上記の目的に合致する範囲（のみ）で有益だと考えることは科学的な心理学を志向するものに共通している。ダンジガーはこうした「行動の科学」というテーゼが、「行動」という概念を発明することで心理学を統一した科学に

しようとする心理学者の政治的な要求とどう結びついてきたかを歴史的な事実に基づいて説明していく。じっさいには分野によってバラバラでとても統一した科学とはいえない心理学が、それぞれの対象を「行動」というオープンな概念に放り込むこと、行動主義の中心概念である「学習」のメタファーをあらゆる心理学的事象に当てはめることで見かけ上の統一を勝ち得た、という分析は絶妙である。

同様の分析は下巻に至って「動機づけ」「パーソナリティ」「態度」などあらゆる重要概念に拡張される。第七章「動機づけとパーソナリティ」では、動機づけという概念が教育や産業界など、人に特定の行為をとらせなるべく「動機づけ」ようとする要請と結びついて誕生し、心理学の中で重要な位置を占めていく過程を分析する。また、「パーソナリティ」の概念が、パーソナリティ理論という枠組みを提供することで精神分析などの深層心理学を心理学の中にとりこむために大きな役割を果たすいっぽうで、分析に用いられる「言語」のもつ歴史的、文化的文脈を捨象するという科学的心理学の問題を拡大したことについても述べられる。第八章「態度」では、社会心理学という新しい心理学が、態度概念とその測定という道具を経由して「行動」によって統一された科学的心理学の一員となっていく過程が分析される。

第九章「メタ言語」では、これまで議論されたような個々の心理学的概念よりもメタなレベルにある「独立変数」「媒介変数」「従属変数」のモデルが、新行動主義の時代

にそれまでの「刺激」反応」のモデルと置き換わることで、より広い事象を自由に放り込める理論的枠組みとして機能するようになり、あらゆることが心理学的に分析できるシステムが準備されていく過程が解明される。とくに、「変数」モデルが実験心理学よりもパーソナリティなどの応用分野で多用されることで、科学(科学メタファー)としての心理学の裾野が広がったとみる分析は重要である。

最後の第一〇章「心理学的種」の本質」においてダンジガーはこれまでの議論を総合し、心理学的概念が自然に存在するような性質を指示対象とする「自然種」ではなく、社会的相互作用によって作られ機能する「人工種」であり、心理学的概念の成立は隠れていた事実の発見ではなく、「事実」の社会的構成とそれが再帰的に心理学者や一般人の認識に影響していく過程であると主張する。

ここでダンジガーが社会構成主義的な視点を意識していることは確かだが、本書全体の印象としては、彼が明確にいわゆる社会構成主義的な立場をとっているようには思われなかった。その点で訳書の「心理学の社会的構成」という副題は、原書の副題が「How Psychology Found its Language」であることを見ても、やや著者の理論的指向性の一部分だけを強調しているようにも思える。

さて、本書には上下巻のそれぞれに訳者による解説が加えられている。上巻の解説は監訳者の河野哲也によるもので、本書の基本的な性質、ダンジガーの経歴や著書、人と

なりなどがよく理解できる。いっぽう下巻の解説は訳者のひとりで気鋭の理論心理学者である五十嵐靖博によるものである。下巻の解説では、現代の理論心理学におけるダンジガーや本書の位置づけの解説にとどまらず、心理学のメタサイエンスとしての理論心理学の基本的な問題意識や研究動向が簡潔に要約されている。こうした理論心理学の発展は比較的最近のものであるため、五十嵐の解説はそうした新しい研究分野の紹介としても価値があるし、解説を合わせて読むことで本書の問題意識や意義のより深い理解が可能になると思われる。

翻訳は全体によくこなれており、読みやすい。本書が多くの心理学者にとって非常に興味深く示唆に富んだ本であることはもちろんであるが、ダンジガーの優れた論理展開と翻訳の妙によって、本書は「心」を対象とした科学や学問に興味を持つ広範囲の人に理解されうると考える。とくに「心のケア」「癒し」「トラウマ」と言った心理学的な言説がわがもの顔に飛び交う現代の日本において、そうした言説に支配されず、現状を批判的に見るための強力な立地点を、本書は与えてくれるのではないだろうか。

(渡邊芳之)